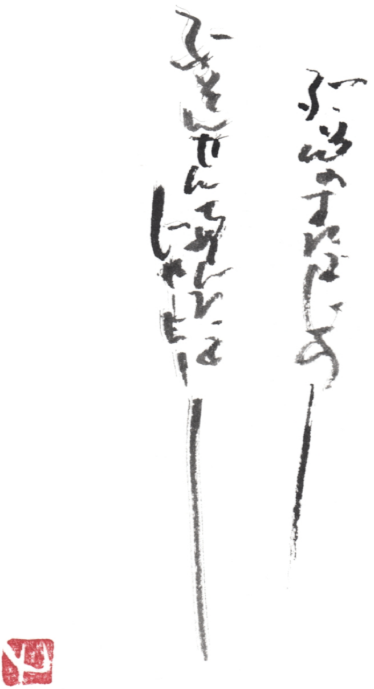
草画帖

第四帖 蕪村号

蘇鉄

しら梅に明けて蕪村の後の空



藪蘭筆。蕪村郷愁、蕪村感傷旅行。
丸亀蕪村寺の庭、蘇鉄の後ろに群生していたのを偲んで。

狗尾草筆。高松菊池寛通りの一茎。蕪村像の杖に頂く。
明和三年蕪村、讃岐高松に上陸滞在。寒山拾得図描く。

プラタナス筆。丸亀駅前の落葉を土産に拾った。
一ところ白く残すと叭叭鳥（ハッカチョウ）の如し。

蘇鉄筆。讃岐の旅から帰って、大きな蘇鉄林に出会った。
拝観叶わなかった蕪村の蘇鉄図はこんなだと踊ってくれるふうら。

蕪村とオリオン

——凧上がる蕪村三百年の空

元旦
裏の廊下に
光が一つ落ちていた
菱形で
珍しいので
カメラで拾っておこうと
戻った時にはもう
金色のダイヤは消えていた

表の鉢から
四つ葉を摘んで
珠洲焼の蕪村像にプレゼント
杖には
暮に見つけた帰り花
午後
神社に詣でて
（祭神は底筒男命・中筒男命・表筒男命）
おみくじは末吉

遠回りして帰れば
栴檀の実に群がる椋鳥
針槐には河原鶸
校庭で凧を揚げる少年もいて

蕪村の
空の
ありどころ

そう言えば初夢に
蕪村と
オリオンの
ライヴ盤なるもの
「オリオンは棍棒を捨てギターを抱えたら絵になる星座。
三ツ星のギターから珠玉の音が鳴りだすだろう。
浦上玉堂なら琴の演奏だけれど、与謝蕪村のライヴは
連句イベントだろうか、水墨パフォーマンスだろうか。」

そんなことを呟き
一月一日
古い詩集を復刻する
『オリオンの扉』

夜

冬の大六角と
オリオン座に
詩集復刊を報告し
ふと懐かしくなった
トラペジウムに
小望遠鏡で会いに行った

遥か彼方に
きららと輝く
四粒の星
これも光のダイヤだった

牡丹筆。牡丹は蕪村に教えてもらった花。
句は金沢犀川大桑村の牡丹を詠んだもの。

牡丹筆。2017年1月22日 （旧暦12月25日）。
蕪村を偲んで牡丹で描いたら、どことなく蕪村に似た？

梅筆。2019年1月30日 （旧暦12月25日）。
蕪村散歩すれば、馴染みの白梅が剪定されていた。その枝で。

棕櫚筆。
棕櫚も叭叭鳥も蕪村ゆかりの友。

草話

無人島に持っていくアルバム一枚を訊かれたら、ジャンゴ・ラインハルト、本一冊なら蕪村句集と答える。迷いはない。共に人間賛歌、宇宙愛に溢れている。独りで暮らしても、淋しさに沈むこともないだろう。

＊

無人島ではなかったが、海を渡って四国へ行った。蕪村のゆかりの地へ、自作の蕪村像を伴って。

昨年の秋に、讃岐の人に誘われて旅人文庫展というのを開いた。会場は高松の瀟洒な本屋「ルヌガンガ」。そのあたりに明和の蕪村も旅の身を置いたはずだ。

＊

イベントが終わった翌日、丸亀の妙法寺を訪ねた。蕪村寺として知られ、二十年ほど前に六角文庫の掲示板に大黒様から案内の書込を受けたことがある。蕪村の残した屏風は期間限定公開で拝観できないのは承知。しばらく無人で、庭で遊ばせてもらった。

最初に薄羽黄蜻蛉が迎えてくれて、それから黄揚羽が来た。褄黒豹紋も来た。みんな蕪村からの手紙だ。

そのうち老僧が帰ってこられた。絵葉書を所望して、蕪村像をお見せすると、「おう、よい顔してなさる」。思いがけぬ一言を戴いた。

雀瓜 華

俳句 白山鳥翁 ／ 絵 艸々子 ／ 詩 泉井小太郎

草画帖 第４号 2019年2月1日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039　Tel 0790-42-6008